

ひろば

です。例外として、教授、助教授も積極的に電子計算機の使用にタッチしています。このような現実を考慮して、各学部、研究所に所属する実際の利用者達によつて、利用者間の連絡会 DECUM (Digital Electronic Computer User Meeting) をもち、すでに15回を数えています。そこでは、サブルーチンの開発、改良や数値解析の勉強もやつていますが、電子計算機使用申込手続の合理化、使用時間割当の改善、使用料金の問題など事務的なことから、電子計算機メーカーの機械保守に対する苦情や、電子計算機スタッフの利用者に対するサービスのこととか、電子計算機使用上の発生する諸問題を話し合い、電子計算機の管理運営運転が円滑になるよう努力しています。今後、大型電子計算機の共同利用に関する重要な具体的諸機構が確立されるでしょうが、全国共同利用という名目で導入されるからには、地方の利用希望者の声も、十分に反映していただき、名実ともに具わつた全国共同利用の電子計算機としての運営を希望いたします。

「物性研究」の編集について

堀 淳 一

最近「物性研究」への投稿がやや偏つて来たように見受けられます。またきくところによりますと、原稿の集まりが非常に悪いという話です。このことは或は「物性研究」というようなものは必要がないことを意味しているのかも知れません。しかし「物性研究」の発刊を推進された方々はこれが是非必要であると考えられた筈で、それが根拠のうすいものだつたということは考えにくいことです。私は発刊にあたつてどのような議論がなされたか殆んど知らないのですが、それとは別にやはり必要だと思つています。その理由は或は京都で考えられた理由と大部違つているかもしれませんが、誌名を「基礎物理」にしようという意見もあつたという話、その他もれ聞いたところから想像しますと、くかけ離れているわけでもないようです。何れにしても、物性研究が早くも物性論研究と同じ運命を辿るのは困つたことだと思うので、お役に立つかどうか

分りませんが、若干私見並びに提案をのべてみたいと思います。

「物性研究」を長続きさせるためには、何等かの特色を出すことが、一番必要だと思います。総花的或は平均的なものを作つたのでは、既存の「物性」とか、「物性研究だより」と類似なものになつてしまうだけでしょうから。しかし一方、特色を出すと片よつたものになつて読者が減少し、経済的に立ちゆかなくなるという危険があることは確かで、難かしい所です。従つて一方向にのみ偏らせたのでは駄目で、いろんな方向に偏らせて多極化させ、これらの“偏つたもの”を総合することが必要だと思います。もつと具体的にいうと、「物性」や「物性研だより」のもっている雰囲気からはみ出たものを「物性研究」で組織的に拾いあげる。というわけです。例えば物性物理や、原子核物理と物性物理の中間領域、或は現在のいわめる物性基礎論の内、どちらかといえば、数理的（方法論的）傾向をもつたもの、等に重点をおき、これらを境界領域として総合することが考えられます。但し「物性研究」は「物性」や「物性だより」とならんで、物性物理一般に関する速報や情報交換や提案などの発表の場という意味もかなり強くもっているのでしょうが、これ以外のものを排除するというのではなく、どんな投稿に対しても、open にしておくことは今まで通り必要だと思います。

研究会報告はすでにしばしば載っていますが、これの内容をもつと豊富にすることは出来ないでしょうか。例えば各研究会はそれぞれ特有の雰囲気や philosophy をもっていると思いますが、これらについて書いてもらうとか、各研究会の内部でなされた種々の議論を結論だけでなく、詳しく書いてもらうとか、研究会報告とは別に「研究会めぐり」というような記事があれば面白いと思います。

何れにしても、受動的に投稿を待つだけでは面白いものは出来にくいでしょうから、積極的にこの種の原稿を集める必要があると思います。他の雑誌でやっているような、特定の問題についてのアンケートをとるとか、色々な人の意見をきくということも試みては如何でしょうか。

北海道のヤツは遠いのをいいことにしてフトコロ手をして勝手なことを言っている、といわれるそうですから、1つだけ具体的な提案をさせていただきます。「物性研究」の編集を各地方のもちまわりにしたら如何でしょうか、即ち

何月号はどの地区の特集、という風にして、頁数の $2/3$ なり $4/5$ を提供し、その分の編集をその地方の編集委員の責任で行う、というわけです。もちろん完全にもちまわりにすることは少くとも始めは困難と思いますから、1年に2～3号を地方特集にする程度のところから試みてみたらどうかと思います。北大は研究者が少いので、そう度々は無理ですが、2年に1回程度ならば何とか出来そうな気がします。もしこういう案が認められましたら、さしあたって1965年の1月号あたりを編集してみてもよいと考えております。

とりとめのないことをかきましたが、何等かの御参考になれば幸いです。

プレプリント案内

- On the Statistical Mechanical Derivation of Correlation Formula for the Viscosity
J.L. Jackson & P. Mazur (Institut-Loveutz, Univ van Leiden)
- General Theory of the Non-linear Optical Properties of Solids, I the Constitutive Relation, P.N. Butcher, T.P. Meleam (Royal Radar Establ, Ministry of Aviation, Malvesn Worcs)
- Scattering of Electromagnetic Waves by an Electron-Phonon System, A. Ron (Princeton Univ., Plasma Phys. Lab)
- On the Connection of the Independent-Pair Model with a Variational Principle, K. Dietrich (Lawrence Rad. Lab, Univ. of California)

以上〔北大物性理論研〕

- The General Theory of Transport Processes and the